

児童期の発達課題についての教育心理学的考察（Ⅱ） —大学教員が兼務した附属小学校校長からの提言—

假屋園昭彦¹

(2022年11月16日 受理)

Educational Psychological Study on Developmental Task in Childhood.
—Perspective of the Principal of an Elementary School Attached to Kagoshima University—

KARIYAZONO Akihiko

要約

筆者は、鹿児島大学大学院教育学研究科の教員（教授）であり、同時に平成29年度（2017年度）から鹿児島大学教育学部附属小学校校長を兼務している。筆者の研究者としての専門分野は、教育心理学および道德教育である。本稿は、筆者が研究者の立場から、同時に校長として附属小学校のPTA文集、PTA新聞へ寄稿した原稿および始業式での挨拶をまとめた内容である。この内容は、附属小の先生方、児童、そして保護者に考えてもらいたいメッセージである。それぞれのメッセージは、心理学、哲学、倫理学の理論を学校教育に当てはめて考察した内容になっている。

キーワード：個性と道の選択、価値の物差し、児童期の発達課題、思考と言葉の関係

問題と目的

I. はじめに

筆者は、鹿児島大学大学院教育学研究科の教員（教授）であり、同時に平成29年度（2017年度）から鹿児島大学教育学部附属小学校校長を兼務している。本稿は、附属小学校のPTA文集およびPTA新聞への寄稿および始業式での挨拶を整理し、まとめた内容である。これらの内容は、教育心理学および道德教育を専門とする研究者が、附属小学校での経験をもとに考察した内容であり、同時に児童および職員の方々へ送ったメッセージである。

それぞれのメッセージで土台になっているのは、心理学、哲学、倫理学の理論である。これら

¹ 鹿児島大学法文教育学域 教育学系 教授

の理論に筆者の考えを加え、校長の立場から教師、児童、保護者に伝えたい内容を作成した。

本稿の構成を以下に示す。

II. PTA文集「ひろば」原稿：平成29年度（2017年度）から令和3年度（2021年度）まで

III. PTA新聞「あおぎり」原稿：平成30年度（2018年度）から令和4年度（2022年度）まで

IV. 始業式 挨拶：平成29年度（2017年度）から令和4年度（2022年度）まで

II. PTA文集「ひろば」原稿

（1）平成29年度（2017年度）

主題：なぜ自己肯定感が必要なのか。

私の専門分野は教育心理学である。そのため公立学校からの校内職員研修の講師の依頼を受けることがたびたびある。その際、依頼されるテーマとして多いのが、「自己肯定感の育て方」である。「本校の児童は自己肯定感が低い。どのように自己肯定感を育てたらよいのかを話してほしい」という依頼が多い。

そこでこの機会に自己肯定感をどのように育てるのか、そして自己肯定感は何が必要なのか、という点について述べてみたい。

児童期の自己肯定感は、他者からの「まなざし」によって育まれる点に特徴がある。他者（特に児童にとって重要な大人）からの肯定的な「まなざし」が児童自身の自分への肯定的な「まなざし」を作る。そこで教師や保護者といった周囲の大人が児童をいかに肯定的に捉えるかが重要になる。

児童を肯定的に捉えるためには、「評価の物差し」をたくさんもっておくことが必要である。「評価の物差し」をたくさんもっておくと、良いところも見えてくる。

たとえば大人社会は成果主義なので、児童を捉える際も、つい成果だけに注目してしまいがちになる。しかし、「頑張ったけれど成果が出なかった」経験を児童は小学校3、4年頃から持ち始める。このとき「評価の物差し」が成果だけであったならば、児童は自分の経験を肯定的に捉えることが困難になる。そこで「評価の物差し」を成果と過程に分けてみる。成果と過程とを別々に「評価の物差し」とするのである。すると成果とは別に過程が評価の対象になる。その結果、「たとうまくいかなかったとしても、自分ができるだけのことを精一杯頑張った、あるいは自分がやらねばならないことがきちんとできた」ことが評価の対象になる。

次に「なぜ自己肯定感が必要なのか。」について述べてみよう。自己肯定感とは自分自身への誇り（矜持）につながる。自分への誇り（矜持）を育むためには自己肯定感が必要なのである。では自分への誇り（矜持）をもつと、どうなるのか。自分への誇り（矜持）をもつと、自分で自分を律することができるようになる。すなわち自律という心の機能が育つ。自律の心をもつと、自分で自分の価値を下げるような行動はとらなくなる。自律の心をもつと、自分の中に行動の判断規準ができてくる。したがって「みんながやっているから」とか「誰も見ていないから」といった周囲の状況によって自分の行動を判断することがなくなる。

このように、自己肯定感が自分への誇り（矜持）を育て、自分への誇りが自律した人間を育てる。私たち教員や保護者は、児童の今だけを見るのではなく、将来、児童にどのような大人になってもraitたいのかを考えながら、児童に接する必要がある。

（2）平成30年度（2018年度）

主題：わが子の個性と親の務め、そして道を選ぶということ

本年度のテーマは「親子で見つける自分らしい生き方・役割」です。このテーマについての私の考えを以下に紹介させていただきます。具体的には、個性とは何か、親の務め、そして道を選ぶということ、の三点です。

第一点は個性です。個性には、出発点としての個性と到達点としての個性の二種類があります。

出発点としての個性は、本人が元来もっている特技、興味、関心です。到達点としての個性は、学習の結果、習得した個性です。到達点としての個性は、守、破、離という言葉で表現されます。守は基礎基本である型の習得、破は創意工夫、離は自分の個性、すなわち自分の型の確立です。

私はあまり早い段階から出発点としての個性にこだわる必要はないと考えます。なぜなら、出発点としての個性にばかりこだわると自分の興味や関心の範囲、能力を発揮する場を自分で狭くしてしまうからです。知的ストライクゾーンを自分で狭くしてしまうのです。突出した才能をもつ子であれば、出発点としての個性を大切にしてもよいでしょう。しかしごく普通の子であれば、到達点としての個性を重視した方がよいと考えます。

個性は簡単には見つかりません。まずは基礎基本を確実に習得し、そのうえで創意工夫を重ねる。そして振り返ったときに、見えてくるのが自分の個性なのでしょう。

そのためには食わず嫌いをしてはいけません。最初からおもしろく感じる分野はありません。学力をピラミッドにたとえてみましょう。ピラミッドの頂点を高くしようと思えば、高さを支える底面積をできるだけ広くとる必要があります。したがって、興味の有無で食わず嫌いをせずに、幅広い分野の基礎学力を習得しましょう。自分の興味の有無だけを学びの軸にしてはいけません。

第二点は親の務めです。親の務めは、親としての欲目は捨て、わが子の能力と適性を冷静に見定めることです。人間は、自分が勝負できる世界で勝負するのが一番幸せなことです。わが子が勝負できる世界を見つけてあげるのが親の務めだと考えます。勝負にならない世界にわが子を無理やり投げ込んでも、かわいそうなだけだと考えます。これは決して努力を放棄しろ、易きに付けと言っているわけではありません。努力すれば勝てる世界を見つけるという意味です。

第三点は道を選ぶ話です。大学の教員という仕事柄、たびたび学生から進路相談を受けます。学生は教員、一般公務員、民間企業など複数の選択肢をもってきます。そしてどれが自分にとっての正解なのかを尋ねてきます。

ここで学生が根本的に誤解している点があります。最初から正解である選択肢が準備されているかのように考えている点が誤りです。選ぶ時点ではどの選択肢が正解かどうかは誰にもわからない

のです。だから自分の選択が正解になるように自分が選んだ道を自分で頑張っていくのです。選んだ道を正解にしていくのは自分です。正解である道を誰かが教えてくれるわけではありません。正解である道が最初から準備されているわけでもありません。

以上、本年度のテーマについて三点ほど私見を述べさせていただきました。

(3) 令和元年度(2019年度)

主題：学びの本質とは何か。一価値の物差しの創造—

勉強している時に、「これを勉強して何の役に立つのだろう。」「この教科は将来必要なのだろうか。」といった疑問は、誰しも一度はもったことがあるかもしれない。また、保護者の皆さんはわが子から勉強の必要性についての質問を受けたことがあるかもしれない。そこで本稿では「学びの本質とは何か」をテーマとし、上記の疑問を考えてみたい。

学びの本質を浮き彫りにするために、私達が商品を購入する際の消費行動と学びを比較してみよう。私達は商品を購入する際に、当該の商品が何に役立ち、何に使うのかを知らないで商品を購入することはあり得ない。消費者は購入する前に、当該の商品にはどんな価値があるのかをわかったうえで商品を購入する。

一方で、学びはどうだろうか。学びは山登りのイメージで捉えるとわかりやすい。登っている最中は、周囲は林だけで空も見えない。今、自分がどのあたりなのか、という実感をもつこともむずかしい。山の山頂に立ってはじめて自分が登ってきたルート、周囲の風景、周囲の中での自分の立ち位置を知ることができる。

学びの本質も山登りと同じである。今の学びから自分がどんな利益を得るのかは、学びが終了するまでは明確にはわからない。したがって今の学びが何の役に立つのか、今の学びにどんな価値があるのかは、学びが終了してはじめて理解できる。学び始める時点では、これからの学びが何の役に立ち、どんな価値があるのかはわからないのだ。これが学びの本質である。この点が学びと消費行動の違いである。

学びは、学ぶ前には自分が存在すら知らなかった価値の物差しを習得し、新たに習得した価値の物差しによって、学びの意義や価値が事後的に(学びが終了してはじめて)明らかになる、という過程をとる。価値がないと判断するのは、価値を理解するだけの物差しを自分がもっていないだけだ。学ぶ過程で学ぶ内容の価値がわかってきたというのは、今まで自分にはなかった価値の物差しが自分の中にできてきたということだ。したがって学びにはその価値がわかるまで我慢する期間が必要なのだ。学びとは、世の中を捉える新しい価値の物差しを自分の中に創造していく過程なのだ。

自分の乏しい価値の物差しで、学ぶ前から「それが何の役に立つのか」と言い放ち、満足する回答が得られなければ学びを捨てるという姿勢は成長を妨げる。自分が今もっている価値の物差しで世の中のすべてがわかると思い込んではいけぬ。児童生徒がもっている価値の物差しではわからない価値が世の中にはたくさん存在する。

私は美術が好きだが、美術を学ぶということは、美術の価値がわかる物差しが自分の中にできてくるといことだ。したがって学ぶ前に「価値がない」と決めつけてしまっはいけない。いつの日かその価値がわかる時が来ることを信じて、簡単に投げ出さずに、学びを続けよう。そして自分の中に価値の物差しを増やしていこう。自分の中の価値の物差しが増えていけば、人間としての器が大きくなり、世の中の複雑さを抱えていけるようになる。

参考文献

内田樹 （2007）下流志向 講談社

（4）令和2年度（2020年度）

主題：児童期の発達課題について

私が専門とする教育心理学の立場から、児童期の発達課題のいくつかを紹介しよう。発達課題とは、乳幼児期、児童期、思春期から青年期、成人期といった各発達段階において、人が習得すべき心の機能（忍耐力、自制心、やり抜く力など）をさす。発達課題は、体験すべき時に、体験すべきことを、体験する過程で習得される。体験すべきことを体験せずに時間だけが経過すると、発達段階にふさわしい心の機能（精神年齢）が育たなくなる。

児童期は忍耐力や自制心といった心の機能を習得すべき時期である。心の機能は、使ってはじめて育つ。使う必要のない心の機能や、なくても生きていける心の機能は育たない。したがって、保護者がわが子にどのような心の機能を習得させたいのか、そのためにどんな経験をさせることが必要なのかを自覚し、そうした経験に相応しい環境設定をしていくことが必要になる。

本稿では、二種類の心の機能（発達課題）を考えてみよう。

まず、忍耐力という心の機能を考えてみよう。忍耐力は我慢するという経験をとおしてはじめて習得される。我慢したことがない場合や我慢する必要がある環境では、忍耐力は習得されない。そこで暮らしの中で児童には、「何かを得るためには、何かを我慢しなければならない」、「何かを達成するためには、何かをあきらめねばならない」といった経験や「あれもほしい、これもほしい」、「あれもイヤ、これもイヤ」とはならないという経験をさせる必要がある。

次に、抽象的な原理・原則を具体的な場面に生かすという心の機能について考えてみよう。どの学校にも、勇気、誠実、友情といった校訓がある。これらは非常に抽象的な原理、原則である。こうした抽象的な原理、原則を、具体的な場面で生かすとしたら、どう動けばよいのかを自分で考える力を習得する必要がある。この力が自主性や判断力といった心の機能に結実する。こうした心の機能を習得しておかないと、具体的な個々のケースを逐一定した指示をもらわないと自分で動けない人間になってしまう。

この心の機能を習得させるため、親にはわが子に任せる度量やわが子に失敗させる度量が求められる。失敗を許してもらえないと、自分で判断して自分で動こうとする意志がなくなる。

そこで、こうした心の機能をわが子に習得させるための親のあり方について考えてみよう。親が

自覚すべき点は、よかれと思って何でも先回りしてお膳立てしてあげるのではなく、わが子の実態に合った適度な負荷を経験させることである。何をどこまでわが子にさせて、どこから親が援助するのかを考える必要がある。すなわち、親が「転ばぬ先の杖」になってあげるのではなく、わが子に「転んだ時の起き上がり方」を学習させるのだ。親がわが子の限界を決めてしまって、この子は「〇〇が苦手だから私が助けてあげないと」ではない。わが子の力を信じて、わが子が苦勞して乗り越える姿を親が見守るのだ。親が先回りして助けてあげるのは楽だ。我慢して見守ることは親としても苦しい。しかし、わが子が苦しんでいる際には、親も共に苦しんでこそはじめて、わが子が成長できるのではないか。

(5) 令和3年度(2021年度)

主題：思考と言葉の関係、そして学ぶことの意味

私が専門とする教育心理学の立場から、思考と言葉の関係について紹介しよう。また主題に示すように家庭の言語環境についても考えてみる。言葉は、通常、コミュニケーションの手段であると考えられがちである。しかし、言葉は単なるコミュニケーションの手段ではなく、思考と深い関係がある。私達は、ものごとを考える際、言葉で考えている。このことは思考が言葉で展開することを示す。したがって思考は言葉の制約を受ける。すなわち、語彙が多ければ思考の幅も広がる。語彙が少ないと思考の幅も狭くなる。語彙の豊かさが思考の広さを決定するのだ。

さらに思考過程での言葉の働きを紹介しよう。人間は言葉によって外界を区分(分類)している。語彙が豊かであれば、外界の細かな区分ができるが、語彙が乏しいと、外界の区分が大雑把で単純になる。したがって、周囲の風景は外界を区分する言葉によって決まる。語彙力は外界の認識のあり方(区分の仕方、解像度)を規定するのだ。

このことを例で示してみよう。日本には雨を表す言葉が多い。私に氷雨(ひさめ)という雨が見えるのは、私が氷雨という言葉を知っているからだ。もし私が氷雨という言葉を知らなければ、たとえ目の前に氷雨が降っていても、私には氷雨は見えない。なぜなら氷雨という言葉を知らないのだから。氷雨であると認識することができないのだ。氷雨という区分ができないのである。

私達には、言葉として知っている対象だけが見えるのだ。言葉として知らない対象は見えないし、自分にとっては存在していないことと同じなのだ。言葉によって外界の区分の仕方(解像度)が変わるからだ。言葉によって外界の区分の仕方が変わる例を示そう。私にパンダが見えるのは、私がパンダという言葉を知っているからだ。もし私がパンダという言葉を知らない場合、私に見えるのは「白と黒の色をしたクマ」になる。すなわち、言葉に先立って対象が存在するのではなく、言葉が対象を作り出すのだ。

このように、思考と言葉は深い関係にある。したがって言葉の豊かさがその人の世界の豊かさを決める。言葉がその人の認識のありようを決める。新しい言葉を知ることによって新しい世界が広がる。

ここに学びの意味がある。学びによって新たな言葉と出会う。新たな言葉を知ること、今まで見えなかった対象が目の前に立ち現れてくる。新たに知った言葉によって世界の見え方（解像度）が変わるのだ。学びの醍醐味は、今まで見ていた風景や出来事が違って見える、という点にある。

言葉の意味は自分で調べるとよい。ただ、意味がわからない言葉に出会ったとしても、言葉だけでも覚えておくとよい。例えば「ひさかたの 光のどけき 春の日に しづ心なく花の散るらむ」という歌がある。意味はわからなくても覚えておくとよい。いつの日か、その意味を実感できる日が来る。言葉を知らなければ意味を実感するという体験もできない。

Ⅲ. PTA新聞「あおぎり」

みだしの「月」は原稿執筆時であり、発行日ではない

(1) 平成30年(2018年)5月「あおぎり」177号

主題：児童期に経験させたいこと：快経験と不快経験

私の大学での専門分野は教育心理学です。そこで本稿では心理学の立場から、児童にぜひ経験してもらいたいことについてお話いたします。

児童期に入ると、日々の暮らしのなかで不快な経験をもつようになります。この時、児童には、自分の力で不快な状態を快適な状態に変えていく経験をもってもらいたいのです。自分で行動し、工夫することによって、不快な状態を快適な状態に変える方法を児童期に経験しておくことは重要です。

この経験によって不快な状態への対処方略を学習することができるのです。もしこうした経験をもたなかったら、不快な状態に陥った時に、そこから逃げるか、一方的に拒否するだけになります。

児童期を過ぎ、思春期、青年期に入ると、みな自分のことで精一杯になり、他人のことまで心配してくれません。自力で状況を立て直していく経験を児童期にもっておくことが大切です。

(2) 平成30年(2018年)12月「あおぎり」179号

主題：失敗と付き合う力

御卒業おめでとうございます。今後の長い人生で身に付けてほしい力は、失敗と付き合う力です。大切なことは失敗しないことではなく、失敗した時の対処方法を学習することです。失敗した時は以下のように考えてみてください。

第一に、失敗は自分が変わる良い機会です。順調な時は変わることが難しいのです。

第二に、失敗の原因が自分の力が及ぶ範囲にあったかどうかを見極めてください。自分の力だけではどうにもならない失敗もあります。その時は「仕方ない」と失敗に拘泥せずに気持ちを切り替えましょう。皆さんには是非、自分なりの失敗への対処方法を見つけてほしいと思います。

(3) 令和元年(2019年)5月「あおぎり」180号

主題：心の機能の育ち方

昨年に続き、私の専門分野である心理学の立場から児童期の特徴についての話をさせていただきます。

児童期は、忍耐力や自制心といった心の機能が育つ時期になります。こうした心の機能は、何もしなくても自然に育つわけではありません。心の機能は、必要に迫られて、実際に使ってはじめて発達します。使う必要のない心の機能や、なくても生きていける心の機能は発達しません。

したがって保護者の方々が、わが子にどのような心の機能を育てたいのかを考え、そうした心の機能を使う必要がある環境を整えてあげることが必要になります。

もし、けじめをつける心の機能を育てたい場合は、生活の中で、人間関係、金銭、服装、時間といった面で、けじめをつける経験をもたせるのです。

どのような心の機能を育てたいのか、そのためにどんな経験をもたせることが必要なのかを保護者が自覚しておく必要があります。

(4) 令和元年(2019年)12月「あおぎり」182号**主題：主体的に判断する力**

御卒業おめでとうございます。卒業生の皆さんには主体的な判断力を身に付けてほしいと考えます。主体的な判断力とは、他人の判断に頼るのではなく、物事を自分で決める力です。そのためには、物事を判断する規準を自分の中にもっておく必要があります。他者の判断の規準で物事を判断、決定しないことです。

自分の行動を他者の規準で決定すると、失敗した時に後悔します。しかし自分の規準で決定した結果であれば、納得することができます。

また他者の指示に従う場合でも、その指示が妥当かどうかを、自分の規準で考えてください。すると本当に大事なことが見えてきます。

(5) 令和2年(2020年)5月「あおぎり」183号**主題：安定と不安定**

私が大学で専門としている心理学の立場から、大人として児童生徒といかに向かい合うか、という趣旨で「安定と不安定」について述べてみます。

児童生徒が不安定になっている時、大人も一緒に不安定になってはいけません。不安定になっている児童生徒と一緒に大人も不安定になると「巻き込まれ」状態になり、結局、共倒れになってしまいます。親が子に「巻き込まれる」状態は頻繁に生じます。

児童生徒が不安定になっているときこそ、大人は安定している必要があります。大人の安定さで児童生徒の不安定さを抱えてあげましょう。この状態を心理学で「抱える環境」と呼びます。

不安定な人には安定した世界が必要です。安定した他者との関係のなかではじめて、自分の不安

や葛藤を自分で抱えていくことができるようになります。これがカウンセリングの原理です。

このように児童生徒は、自分の不安定さを大人に抱えてもらいながら、次第に自分で自分の不安定さを抱える力を身に付けていきます。

（6）令和3年（2021年）1月「あおぎり」185号

主題：目標の種類

御卒業おめでとうございます。この先、皆さんは、目標について考える機会が増えることでしょう。目標には種類があることを知っていますか。

目標までの距離によって、目標は複数の種類に分かれるのです。目標までの距離が短い場合、出発する時点で明確な目標が見えます。一方で、目標までの距離が長い場合、出発する時点ではその目標は見えません。この場合、最初は見えなくても、進んでいくうちに次第に見えてきます。

例えば、「中学時代に達成したい目標」といっても、今は明確には見えないものです。まずは直近の事柄に取り組んでみてください。次第に目標が立ち現れてきますよ。

（7）令和3年（2021年）5月「あおぎり」186号

主題：学びと価値観の次元

学びとは自分の高度を上げていくことです。自分の高度が上がれば、自分を捉える価値観の次元が上がります。高次の価値観で生きることができるのです。このことによって、どんな境遇に置かれても、自分の状況を積極的に意味づけることができるようになります。

女子サッカー「なでしこジャパン」がワールドカップで優勝した際の、元日本代表の野田朱美氏の次の言葉は、高次の価値観で生きる例を表しています。「自分のためだけにプレーする選手は日本代表にはいない。女子サッカーそのものの価値を高めるために戦うから最後まで走り続けることができる」。どんな次元の価値観で自分を支えるかによって、自分の現状を捉える解釈が変わってきます。その結果、失意や挫折にも泰然と耐えていくことができるのです。

学びをとおして自分の高度を上げましょう。高所から見れば順境も逆境もありません。自分の境遇だけに囚われるのではなく、自分の境遇以上の所に目を向け、そこから自分の境遇を見下ろす力を身に付けましょう。

（8）令和3年（2021年）12月「あおぎり」188号

主題：知的ストライクゾーンは広く

ご卒業おめでとうございます。今後の長い人生で身に付けてほしい力は、知的ストライクゾーンを広く保とうとする姿勢です。知的ストライクゾーンとは、自分が知らない知識と価値観を積極的に受け入れようとする姿勢です。

知的ストライクゾーンが狭いと、新しい知識と価値観を「食わず嫌い」的に一方的に拒否するだ

けになるのです。すなわち、今の自分の興味や関心に閉じこもり、新しい世界に踏み出すことができなくなります。知的ストライクゾーンの広さは、人間としての器の大きさになります。できるだけ多くの知識と価値観を身に付け、器の大きな人間になってほしいと思います。

(9) 令和4年(2022年)5月「あおざり」189号

主題：叱り方のポイント

私が専門とする教育心理学の立場から、叱り方についての話をいたします。

人間には二つの側面があります。存在面と行動面です。ポイントは、叱る方も叱られる方もここを混同しないことです。子を叱る場合、特定の場面での行動の修正を求めているのであって、子の人格や存在を否定しているわけではありません。「あなたのことは好きだけれど、やったことはいけないよ」という感覚が必要です。

叱ることの目的は、物事の判断基準を子に学習してもらうことです。したがって「子の今だけを見ない」ことです。最終的にどんな人間に育ってほしいのかを考えましょう。そのためには、子を叱る際に、子に学習してもらいたい判断基準を叱る理由として示してあげましょう。

さらに注意すべき点は、親の気分や体調によって、同じ行動に対して叱ったり、叱らなかつたりすることです。この現象を二重拘束と呼びます。二重拘束が生じると、子は明確な判断基準を学習できなくなります。子に示す判断基準は一貫した内容にしましょう。

IV. 始業式

(1) 平成29年度(2017年度)前期前半 2017年4月6日

主題：自分が変わるということ・みんなと同じ気持ちになるということ

おはようございます。4月になりました。今日から前期が始まります。新しい季節が始まります。新しい季節が始まると校長先生は胸がわくわくします。これからどんな勉強が始まるのだろう。これからどんな友達ができるのだろう。これからどんな先生と出会えるのだろう。とても楽しみです。どうして楽しみなのでしょう。

新しい勉強が始まり、新しい友達ができ、新しい先生と出会うことによって、自分がどんどん変わって新しい自分になることができるからです。昨日の自分から今日の自分、そして明日の自分へ。これから始まる学校生活の中で、自分がどんなふうに変わっていくのかとても楽しみです。

これから始まる一年間の学校生活の中で、みなさんはきっと去年とは違う新しい自分に変わっていくことでしょう。みなさんが変わっていく姿をみることを校長先生も楽しみにしています。

学校行事も楽しみです。春の遠足、リレー大会、写生会もあります。クラスのみんなで一緒に頑張ることも楽しみです。どうしてみんなで一緒に頑張ると楽しいのでしょうか。

頑張った後は、どんな気持ちになりますか。うれしいという気持ちになります。すっきりした気持ちになります。一人でうれしい気持ちになるより、みんなで一緒にうれしい気持ちになった方がう

れしい気持ちが強くなります。一人ですっきりした気持ちになるより、みんなで一緒にすっきりした気持ちになる方がすっきりした気持ちが強くなります。

みんなで同じ気持ちになると、その気持ちが強くなります。みんなで一緒に楽しい気持ちになると一人の時の楽しさより、楽しさが強くなります。クラスの間々と一緒に学校行事を頑張って、みなさん一人ひとりが楽しいと思えるクラスを作ってください。

これで校長先生のお話を終わります。

（2）平成30年度（2018年度）前期前半 2018年4月6日

主題：挨拶の意味

児童のみなさんは腰を降ろしてください。おはようございます。今日から、新しい学年が始まります。みなさんも、これからの新しい学校生活をとても楽しみにしていることと思います。

今年は、みんなで、気持ちのよい挨拶をすることを心がけましょう。挨拶をするのが恥ずかしいと思っている子や、今まであまり積極的に挨拶をしてこなかった子もいるかもしれませんね。そこで今日は、挨拶にはどんな意味があるのか、そしてどうして挨拶が必要なのか、を話してみます。

挨拶は、「あなたが目の前にいることに私は気づいていますよ、私はあなたのことを認めていますよ」というメッセージです。たとえ自分の目の前に人がいても、挨拶をしなかったら、目の前の一人を認めていないことになります。このように挨拶には、相手のことを認める意味があります。だから挨拶を交わすことは、お互いを認め合うことになります。

次にお互いに挨拶をすると、安心できます。山登りをしていると、見知らぬ人とすれ違った時でも挨拶を交わします。これは互いに安心できるからです。そしてお互いに相手を認め、安心することによってはじめて、相手と仲間になることができます。相手とつながることができるのです。このように挨拶をとおして、私達は仲間になることができます。

人と言葉を交わすことはキャッチボールと同じです。言葉はボールにたとえることができます。挨拶の言葉をキャッチボールのように交換しましょう。人と言葉を交わすことはキャッチボールと同じという話をしましたね。これがドッジボールにならないように注意しましょう。

人と言葉を交わすことはキャッチボールであり、ドッジボールではありません。どうしてドッジボールではないのか。その理由は、みんながこれから自分で考えてみてください。

参考文献

伊藤守 （1995） こころの対話 講談社

（3）平成30年度（2018年度）後期前半 2018年10月10日

主題：言葉の役割－名前役割－

みなさん、おはようございます。今日はみなさんに言葉を学ぶ楽しさについて話をします。皆さんは、毎日の授業の中で新しい言葉を覚えていますね。新しい言葉を覚えると、どんなことが起き

るかを考えてみましょう。

例えば、空に浮かぶ雲。雲というのも言葉です。他にも雲を表す言葉がありますね。どんな言葉を知っていますか。入道雲、うろこ雲、すじ雲。雲の種類を表す言葉があります。もし私達が、「入道雲」という言葉を知らなかったら、「入道雲」は見えると思いますか。「入道雲」という言葉を知らなかったら、ただの雲にしかみえませんよね。「入道雲」は見えません。「入道雲」という言葉を知っているから入道雲が見えるのです。

同じように「うろこ雲」という言葉を知っていたら、「うろこ雲」が見えます。「うろこ雲」という言葉を知らなかったら「うろこ雲」は見えません。ただの雲です。私達は言葉として知っているものしか見えないのです。

ほかには動物のパンダ。パンダという言葉を知っているからパンダが見えます。もしパンダという言葉を知らなかったら、パンダを見て何と思うでしょうね。「変わった色をしたクマだなあ」と思うでしょうね。パンダという言葉を知っているからパンダが見えます。パンダという言葉を知なかったら、パンダは見えません。

これが言葉の役割です。新しい言葉を覚えることによって、いままで見えなかったものが見えてきます。新しい言葉を覚えることによって、見える風景が違ってきます。言葉をたくさん覚えると、覚えた分だけものが見えてきます。見えてくるものが増えると自分の世界が豊かになります。

雨にもいろんな種類があつて、どんな名前の雨を知っていますか。 夕立ち、春雨、にわかあめ。夕立という言葉を知っているから夕立が見えるのです。夕立という言葉を知らなかったら夕立は見えません。

みなさんは、「キツネの嫁入り」という名前がついた雨を知っていますか。キツネの結婚式ですね。「キツネの嫁入り」ってどんな雨なんでしょうね。どうしてそんな名前がついたのでしょうかね。興味があったら調べてみてください。そうすれば、キツネの嫁入りという雨が見えますよ。キツネの嫁入りという雨が見えた人は校長先生にも教えてください。

これからたくさんの言葉を覚えて、自分の世界を豊かにしてくださいね。

(4) 平成30年度後期後半 2019年1月8日

主題：目標の種類とやる気

みなさん、新年、あけましておめでとうございます。これから新しい一年が始まります。これからの一年に向けて、あるいは後期後半に向けてみなさんいろんな目標を考えていると思います。

そこで今日は、目標とやる気の関係について話をしたいと思います。目標とやる気には、とても深い関係があります。まず目標には種類があります。そして目標の種類によって、やる気が出たりでなかったりします。あるいは目標の種類によって、やる気が長続きしたり、長続きしなかったりします。たとえば、達成するのがあまりにも難しい目標の場合、やる気がでないでしょう。反対にあんまり簡単な目標でもやる気がでないでしょう。

一番やる気が出て、しかもやる気が長続きする目標は、自分で作った目標です。自分で作った目標だから、なぜ自分にはこの目標が必要なのか、という目標の必要性がわかります。さらに一つの目標が達成できたら、次の新しい目標を自分で作ればよいのです。だからやる気が長続きします。自分の目標をどうやって作ればよいのか、という作り方を紹介します。

まず、学校や学級の目標があります。これを土台にします。たとえば、附属の挨拶「あいうえお、じ」という目標がありますね。「あ」は相手の目を見て、「い」はいい声で、「う」は美しい姿勢で、「え」は笑顔で、「お」は想いをこめて、これに「じ」は自分からを加えます。

これらの学校や学級の目標を、さらに詳しく具体的に考えると自分の目標ができます。たとえば、「いい声で」というのはどんな声だろう、と自分で考えるのです。「美しい姿勢で」というのは、どんな姿勢だろう、と自分で考えるのです。「想いをこめて」というのは、どんな思いだろう、と自分で考えます。すると、自分で作った目標が出来上がります。挨拶の例を使うと、「美しい姿勢」というのは、背筋を伸ばして、顔を上げることだ、という目標を自分で作ります。

自分で作った目標だから、やる気が出てきます。自分で作った目標から生まれるやる気を心理学で、自律的動機づけと言います。自分で作った目標だから、目標の必要性もわかるので自分で納得して行動できます。目標の必要性が納得できるとやる気が出てきます。

さらに目標が達成できたら、次の新しい目標を自分で作ることができます。だから、やる気が長続きします。たとえば、この挨拶を学校だけではなく家でもやってみよう、というように目標を実行する場所や範囲も広がります。新しい目標が次から次に出てきます。

目標の達成が難しい場合は、途中で目標を修正することも自分の目標づくりになります。今年は、学校や学級の目標を、さらに詳しく考えて自分の目標を作る工夫をしてみてください。自分で作った目標が「なりたい自分」の姿になります。

（５）平成31年度前期前半 2019年4月6日

主題：「やさしさ」って何だろう

児童のみなさんは腰を降ろしてください。おはようございます。今日から、新しい学年が始まります。みなさんも、これからの新しい学校生活をとても楽しみにしていることと思います。新しい学年が始まるにあたり、校長先生からは「やさしさ」についての話をします。

どうしたら私達は人にやさしくできるのでしょうか。なぜ私達は人からやさしくしてもらいたいのでしょうか。どうしたら、やさしくしてもらえるのでしょうか。それでは、どんな時に、この人は優しい人だなあって思いますか。おそらく「自分がしてほしいな」ということを相手がしてくれた時に「この人はやさしいな」と思うでしょう。

でも、それは本当のやさしさというのでしょうか。相手が自分に都合のよいことをしてくれたらやさしくて、してくれなかったらやさしくない。相手が「してほしいな」と思っていることをしてあげることがやさしさなののでしょうか。

人にやさしくしてあげることはそんなにむずかしいことではありません。大切なことは、必要なことと欲望という2つを区別することです。人間には必ず必要なことがあります。おなかがいっぱいから食べ物が必要です。怪我や病気をしたらお医者さんが必要です。

でも欲望というのは、必要をとおりこして「もっと欲しい」「もっと欲しい」になってしまうことです。やさしというのは、相手の必要を満たしてあげることなのか、相手の欲望を満たしてあげることなのかを考えてみてください。校長先生からの宿題です。

参考文献

アルボムッレ・スマナサーラ 「やさしい」って、どういうこと。 (2007) 宝島社

(6) 令和元年前期後半 2019年8月26日

主題：自分らしさ

おはようございます。今日から前期後半が始まります。前期後半が始まるに当たり、みなさんに「自分らしさ」についての話をしたいと思います。私たちは自分らしさを考えるとき、つい自分とほかの人を比べてしまいます。「友達は走るのが得意だ。それに比べて自分は…」とか。「友達はピアノが上手。それに比べて自分は…」というように、自分と他の人を比べて「うらやましいな」と思ってしまう。まわりの人と自分を比べると、うらやましいと思う心、ねたましいと思う心、ひがみ心が生れます。他の人を、うらやみ、ねたみ、ひがみでも、決して自分らしさは見つかりません。

大切なことは、自分にはないものばかりを欲しがったり、自分にはないものばかりを求めないことです。自分にはないものばかりを欲しがらない。すると欲しがらなくても、今、自分はすでに十分、よいところをもっていることに気づきます。

自分にはないものばかりを欲しがらない。すると、本当に必要なものは何かがわかってきます。そしてそれはすでに自分も持っているものの中にあることがわかります。

自分にはないものばかりを欲しがらない。すると、欲しがっていたときには見えなかったことがたくさん見えてきます。

自分にはないものばかりを欲しがるのではなく、自分も持っているものに目を向けてみましょう。そして自分も持っているものを、まわりの人達に発揮してみてください。するとお互いを支え合うことができます。お互いを支え合うことができはじめて自分らしさを感じることができます。

自分らしさは色にたとえることができます。虹を考えてみましょう。虹は違う色が七つ集まってできています。一つ一つの色が違うからこそ全体として輝いて見えるのです。

学級も同じです。一人一人が違う色を持ち寄れば、きれいな虹を作ることができます。輝く学級を作ることができます。以上で校長先生の話が終わります。

参考文献

加島祥造 (2007) 求めない 小学館

（7）令和元年度後期前半 2019年10月15日

主題：届ける挨拶

おはようございます。今日から後期が始まります。後期にみんなで頑張りたいこととして、挨拶の話をします。これまでは「挨拶をしよう」がテーマでしたが、後期からは単に挨拶をするのではなく、「挨拶を届けよう」がテーマになります。そこで「届ける挨拶とはどんな挨拶なのか」、「どうしたら届ける挨拶」ができるようになるのか、を考えてみましょう。

「届ける挨拶」をする場合、まず挨拶をとおして「何を届けるのか」をしっかり考えながら挨拶をするとよいでしょう。「何を届けるか」を考えずに挨拶をすると単に挨拶をするだけになってしまいます。

「何を届けるのか」を考えると、挨拶をとおして、笑顔、元気、自分の気持ち、を届けることができることがわかります。挨拶をとおして何を届けることができるかを考えてみましょう。そして何かを届けることによって、自分と相手はどう変わるかを考えてみると届けることの大切さがみえてきます。

次に「まわりの人に何かを届けたいという気持ち」が大切になります。周りの人に対する興味や関心があつてはじめて「何かを届けたい」という気持ちが起こります。もし「まわりの人に何かを届けたいという気持ち」をもたなかったら、どんな友達関係や学校生活になるかを考えると、「届けたい」という気持ちをもつことの大切さが見えてきます。

さらに相手と直接、顔を会わせることの大切さを感じてほしいと思います。いまの社会は、スマートフォンやメールなど直接相手と顔を会わせなくても、連絡を取り合うことができます。伝えたい事柄があれば、直接、顔を会わせなくても伝えることができます。しかし、直接顔を会わせないと「伝えられないこと、届けられないこと」があります。それは何かを考えると、どうして直接顔を会わせて届けることが必要なのかわかってきます。

さいごに、挨拶は呼びかけです。まわりの人からの呼びかけに私が応じること。「呼びかけ」と「応じる」ことによって、お互いの間に通路ができます。お互いの間に通路ができることを関係ができると言います。挨拶によって相手に呼びかけ、応じることによって、周りの人達とたくさんの通路を作ることができ、たくさんの関係を作ることができます。すると自分の世界が広がります。

以上のことを考えながら、後期は、ぜひ、相手に呼びかけ、届ける挨拶を実践してみてください。

（8）令和元年度後期後半 2020年1月8日

主題：続けることの意味

おはようございます。今日から後期後半が始まります。そしてこれから新しい一年が始まります。新しい一年が始まるに際し、何かを続けることの意味について話をします。

何かを続けていくということは、何かを重ねていくということです。たとえば自分にもできそう

な小さな我慢を続けていくとしますね。小さな我慢を続けることは、小さな我慢を積み重ねていくことになります。

小さな我慢を続けて、小さな我慢を積み重ねていくと、大きな我慢になりますね。この大きな我慢が我慢する力になります。大きな我慢が強い意志です。小さな我慢を続け、小さな我慢を積み重ねていくことが大きな我慢に育ちます。積み木を重ねていくイメージです。

小さなことを続けていくと、大きくすることができます。これが何かを続けることの意味です。例えば、朝のちょボラの掃除。みんな竹ぼうきの使い方が上手です。これもみなさんが竹ぼうきを使い続けたからです。最初は、うまく使うことができなかったかもしれない。不完全な使い方です。不完全でもいいから続けることが大事です。不完全を続けていく。そして不完全を積み重ねていくとだんだん完全に近づいていきます。

小さな我慢を続けていくと大きな我慢になる。不完全を続けていくと完全になる。これが続けることの意味です。今年一年、ぜひ何かを続けてみてください。これで校長先生の話を終わります。

(9) 令和2年前期前半 2020年4月6日

主題：学校はどんなところか、思いやりとは

おはようございます。新型コロナウイルスという感染症の影響で3月に学校がお休みになり、修了式をはさんで今日、新しい年度を迎えました。

みなさんには、ぜひ、この時期を「学びの機会」にしてほしいと思います。「学びの機会」にするためには、次の三点を考えてください。

第一に、学校は自分にとってどんなところなのかを考えてみてください。学校で、先生と友達と一緒に勉強すると、どんなところが楽しいのか、なぜわかりやすく勉強できるのか、なぜやる気のでるのか、を考えてください。また勉強以外では私達は学校生活のなかで何を学んでいるのか、を考えてください。学校では、「クリーンタイム」や「ちょこっとボランティア」といった掃除、高学年では委員会活動、朝の挨拶運動、通学子ども会、クラブ活動、給食があります。こうした学校生活の活動のなかで私達は何を学んでいるのか、を考えてみましょう。運動会や音楽発表会といった学校の行事では、「みんなで一緒に一つのことに挑戦し、やり遂げること」のよさは、どんなところにあるのかを考えてみましょう。

第二に、怪我をしてしまったたり、病気になった人の気持ちを考えてみてください。2月から3月にかけて、多くの人が新型コロナウイルスという病気にかかり、亡くなった人も出ました。コロナウイルスに限らず、怪我をしたり、病気になったら人はどんな気持ちになるのかを考えてみましょう。そして、亡くなった人はどんな気持ちだったのかを考えてみましょう。これは私達自身が怪我や病気をした時にどんな気持ちになるかを考えてみるとわかると思います。怪我をしたり、病気になった患者さんやその家族の人達の思いを想像してみましょう。これが人を「思いやる」ということです。「思いやり」について考えてみてください。

第三に、特定の病気に対する差別や偏見の心をもたないようにしてください。皆が社会のメンバーです。仲間はずれにしないようにしましょう。

予防はしっかりと行ってください。そして同時に怪我をしたり、病気になったりした人達の気持ちを思いやる心をもってください。

(10) 令和2年度前期後半 2020年8月24日

主題：言葉と心の関係：二つの道筋

おはようございます。今日から前期後半が始まります。前期後半は運動会や教育実習といった大きな行事があります。健康に充分気をつけて過ごすようにしてください。

今日は皆さんに言葉と心の関係について話をしてみます。皆さんは、言葉と心にはどんな関係があると思いますか。言葉と心との間には二つの道筋があります。「心から言葉へ」という道筋と「言葉から心へ」という道筋です。

一つ目の道筋は「心から言葉へ」という道筋で「心に思ったこと」を言葉で表現するという道筋です。これは心が先で言葉が後にくるので、「心から言葉へ」という順序になります。皆さんは、この道筋のイメージをもっていることが多いでしょうね。

さらに言葉と心には二つ目の道筋があります。二つ目の道筋は、一つ目とは逆で「言葉から心へ」という道筋です。これは最初に言葉で表現する。するとその後、言葉と同じ心が生まれるというものです。たとえば「ありがとう」と言葉で表現することによって、相手への感謝の心が生まれます。「さようなら」と言葉で表現することによって、「今日はこれまでだね、また明日会おうね」という別れと再開への心が生まれます。「ごめんね」と言葉で表現することによって、「相手に悪いことをした」という心が生まれます。

これが言葉によって心が生まれるという道筋です。このように言葉には心を生み出すという働きがあります。

ぜひ、相手への心や気持ちを表す言葉には、どんな言葉があるかを考えてみて下さい。そしてその言葉を実際に使うことによって、自分がどんな心や気持ちになるかを考えてみてください。すると、こんな言葉はどんどん積極的に遣った方がいいな、でも、こんな言葉はあまり遣わない方がいいな、ということもわかってきます。

すると、相手に対してだけではなく、自分に対しても、自分で自分にどんな言葉をかけるといいのかも見えてきます。つらい時や悲しい時、自分で自分に言葉をかけることによって、自分に新しい心や気持ちが生まれます。言葉によって自分で自分の気持ちを変えることができますよ。

ぜひ試してみてください。以上で校長先生の話を終わります。

(11) 令和2年度後期後半 2020年10月13日

主題：やる気と行動：二つの道筋

おはようございます。今日から後期が始まります。後期も毎日の授業や学校行事に取り組んでほしいと思います。

こうした取り組みの際に重要になるのが、やる気です。皆さんにやる気をもって後期の学校生活を送ってもらうために、今日は、やる気と行動の関係について話をします。

やる気と行動との間には、二つの道筋があります。一つ目は「やる気から行動へ」という道筋です。二つ目は「行動からやる気へ」という道筋です。

一つ目の「やる気から行動へ」という道筋は、やる気を出してから行動する、という順番です。やる気を出してから、勉強や運動、掃除といった行動に移るという順番になります。やる気を出してから勉強に取り組む、という順番です。この順番は、皆さんがやる気についてもっている普通のイメージだと思います。

ここで困ったことが起きます。やる気というのは、出る時もあれば、なかなかやる気が出ない時もあるということです。やる気が出る時はいいのですが、やる気が出ない時は、どうすればよいでしょうか。何もせずにやる気が出るまで待ちますか。

やる気が出ない時は、何もせずにやる気が出るまで待つ必要はありません。こういう時は二つ目の道筋を通りましょう。行動からやる気へ、という道筋です。一つ目の順番とは逆の順番になります。これは、行動を始める時はやる気が出ていなくても、行動しているうちに次第にやる気が出てくる、という道筋です。勉強でも掃除でも、最初はやる気があってもなくてもいいから、まず動いてみるのです。まず教科書を広げてみましょう。まずホウキやゾウキンをもってみましょう。実際に動いて、行動を始めてみると、次第にやる気が生まれてきます。行動がやる気を引き出してくれるのです。行動にはやる気を引き出してくれる働きがあります。これが二つ目の行動からやる気へ、という道筋です。

やる気が出ない時は何もしないでいるのではなく、まず動いてみましょう。鉛筆を握るだけでも、ノートを広げるだけでも、行動すると現実が変わります。現実が変わると気持ちも変わり、やる気も出ますよ。「まず動いて現実を変える、現実を変えることで気持ちを変える」ことをぜひ、試してみてください。以上で、校長先生の話が終わります。

(12) 令和3年度前期前半 2021年4月6日

主題：どんな人になりたいか

おはようございます。今日から新しい年度が始まり、皆さんは新しい学年になりました。特に四月は始まりの季節なので、これからの自分を想像する時期でもあると言えます。

そこで今日は「将来の自分」についての話をしてみます。

「将来の自分」を考えると皆さんは、「自分は将来、何になりたいか」という将来、自分がやってみたい仕事を想像することが多いと思います。たとえば「お医者さんになりたいとか、学校の先生になりたい」といった将来の仕事を想像することが多いと思います。

ここで「将来の自分」を考える時に、「何になりたいか」だけではなく、もう一つ考えてもらいたい将来の姿があります。それは、「どんな人になりたいか」ということです。すると「人の気持ちがわかる人になりたい」「人から信頼される人になりたい」といった姿が思い浮かぶと思います。「何になりたいか」だけを考えている時とは違った将来の自分の姿を思い浮かべることができます。「どんな人になりたいか」を考えると、自分がこれから目指すことや身に付けたいことがらが、はっきりしてくると思います。

将来の自分の姿を考える時には、仕事というところだけではなく、どんな人になるかというところを考えると、自分が目指す姿がはっきりしてきますよ。

このように何かを考える時には、一つのところから考えるのではなく、別のところから考えてみると自分の考えがだんだんはっきりとしてきます。今日は「何」と「どんな」を紹介しました。みなさんも「他にどんなところから考えられるかな」を常に意識してみてください。

(13) 令和3年度前期後半 2021年8月23日

主題：落ち着いて行動・きまりの必要性

おはようございます。今日から前期後半が始まります。皆さんも知っているとおり、夏休みの間にコロナ感染が広がってきました。先の見通しも立ちにくい毎日で、皆さんも不安になったり、心配になることがあったかと思います。そこで今日は皆さんに、このような毎日を送る中で、心がけてほしいこと、覚えておいてほしいことを、二点お話します。

第一に、落ち着いて行動する、ということです。不安になりがちなきこそ、落ち着いて行動することが必要です。先生方が皆さんのことを考えて、きまりを作ってくださっています。このきまりをしっかり守れば大丈夫です。きまりをしっかり守っていれば、あわてたり、とまどったり、うろたえたり、うきあしだったり、こわがったりする必要はありません。フワフワソワソワせずに、落ち着いて、冷静に行動しましょう。

第二に、なぜきまりが必要なのかを、自分でしっかり考えてほしいということです。きまりごとが多くて不満に思うこともあるかもしれませんが、そんなときには、きまりは何のためにあるのか、なぜ必要なのか、きまりがなかったらどんなことがおきるのか、一人一人がきまりを守らなかったらどんなことがおきるのか、というきまりの必要性を自分で考えてみてください。

なぜきまりが必要なのかを自分で考えることができると、どのように動けばよいのかが見えてきます。やってよいこととやってはいけないことの区別がつくようになります。先の見通しが立ちます。落ち着いて行動することができるようになります。

この二点を心がけておくことで、充実した前期後半を過ごすことができると思います。皆で協力して充実した前期後半にいたしましょう。

(14) 令和3年度後期後半 2021年10月13日

主題：できること・してもよいこと

おはようございます。今日から後半が始まります。新しい生活の始まりにあたって今日は、「できることと、してもよいこと」、について話をします。

今のみなさんには、できることがたくさんありますね。ここで考えてもらいたいことは、「自分にできるからといって、してもよいのか」という問題です。「自分にできることと、してもよいこと」は同じですか。それとも違いますか。「自分にはできる。だからしてもよいのだ」となりますか。それとも「自分にはできる。だからしてもよいのだ」とはならないですか。自分にできることであれば、つい、やってしまいそうですね。

みなさんの生活で考えてみます。みなさんは言葉をたくさん知ってますね。たとえば、みなさんが電車やバスに乗っているときに、まわりの大人の人から注意されたとしますね。みなさんは言葉をたくさん知っていますから、注意されたときに言い返そうと思えば、言い返すことができます。言い返すことができるからといって、言い返してもよいとなりますか。

またみなさんは、クロムブックというパソコンを使って毎日勉強していますね。クロムブックを使って、写真やビデオをとったり、プログラムをつくったり、チャットで会話をしたり、できることがたくさん増えました。では、クロムブックを使ってできることは、何でもしてもよいのでしょうか。

できることと、してもよいことは同じですか、それとも違いますか。自分にはできる、だからしてもよいのだ、となりますか。他にはどんな例があるかを考えてみてください。

世の中はとても便利になって、校長先生が小学生だった頃と比べて、皆さんはとてもたくさんことができるようになりました。

たくさんことができるようになったときにこそ、自分ができるとのなかには、してもよいことと、できるけれど実際にはしてはいけないことの両方があるのだ、ということをぜひ知っておいてください。

人間の力には二種類あります。一つ目はできることを増やしていく力です。二つ目は、できるようになったことの中で、してもよいことと、してはいけないことを見分ける力です。見分ける力を判断力と言います。

みなさんには、一つ目の力だけではなく、二つ目の、見分ける力もぜひ身に付けてほしいと思います。以上で校長先生の話が終わります。

(15) 令和4年度前期前半始業式 2022年4月6日**主題：全員が同じことをしたら**

おはようございます。今日から皆さんは、新しい学年になりました。そして新しい学級になりました。新しい学級の友達とこれから一年間、一緒に生活していきます。楽しく、暮らしやすい学級にしたいですね。そこで今日は、楽しく、暮らしやすい学級にするためには、どうしたらいいかを

考えてみましょう。

そのためには、次のように考えます。学級全員の人が同じ行動をとった時に、その学級が暮らしやすい学級になっているかどうかを考えます。たとえば、「どうしてウソをついたらいけないのですか」という質問には次のように考えます。「この学級全員の人がウソをつきはじめたら、この学級はどんな学級になるだろうか、暮らしやすい学級になるだろうか」と考えます。

暮らしやすい学級にするためには、学級の全員が同じ行動をとったら、学級がよくなるか、悪くなるかを考えて行動するといいいですよ。これは、自分が行動する時に「学級の全員が自分と同じ行動をとったら、この学級はどうなるだろうか」ということを行動する時の判断の基準にすることです。自分の行動を学級の全員にあてはめて考えるということです。

よくある例で考えてみましょう。学校にはルールやきまりがありますね。ここで、学級の全員が「自分一人くらいルールを破ってもどうってことないや」と思って行動したら、学級はどうなりますか。あるいは学級の全員が「誰も見ていないし、バレなければいいや」と思って行動したら、学級はどうなりますか。

友達で考えましょう。自分と仲が良い人、仲が良くない人もいるでしょうね。好きな人も嫌いな人もいるでしょう。仲が良くない人や嫌いな人には「私あの人嫌いだから、話もしないし、協力もしないし、無視する」って学級の全員が思って行動したら、学級はどうなりますか。逆に、学級の全員が「仲が良くない友達とも、どうしたらつきあっていけるか、つきあっていくのための工夫をしてみよう」って考えたら、自分の学級はどうなるでしょう。とても暮らしやすい学級になるでしょうね。

これらは、学級の全員が自分と同じ行動を取り始めたら、この学級はどうなるかを考える例です。どんな行動をとろうかな、と迷った時には、学級の全員が自分と同じ行動をとったらこの学級は楽しい学級になるだろうな、という行動をとってみてください。暮らしやすい学級になるかどうかは、みんなの心がけで決まります。一人一人が自覚して暮らしやすい学級を作っていきます。これで校長先生の話が終わります。

(16) 令和4年前期後半 2022年8月22日

主題：けじめの話

おはようございます。今日から前期後半が始まります。前期後半は、運動会や教育実習等、大きな行事が予定されているので、気持ちが、ふわふわして、生活に落ち着きがなくなってしまうことが予想されます。また来週からは、にこにこ週間が始まります。にこにこ週間は、しっかりした生活習慣を心がける取り組みです。

これらのことを考え、今日は、けじめの話をしたいと思います。どうすれば、けじめのある生活を送ることができるかを考えてみます。

けじめとは、行動を切り替えて、その場にふさわしい行動や態度をとる、という意味です。今し

なければならない行動をとる、という意味です。はじめには、多くの種類があります。どんな種類のはじめがあるかを考えてみましょう。たとえば、時間のはじめ、服装のはじめ、言葉遣いのはじめ、人間関係のはじめ、道具の使い方のはじめ、が考えられます。ではどうすれば、はじめをつけることができるかを考えてみましょう。

はじめをつけるためには、目的意識をもつことが必要です。目的意識とは、今は何をする時間なのか、今は何のために行動しているのか、この道具は何のために使うのか、という目的を考えることです。目的を考えながら行動することではじめをつけることができます。

目的を考えると、掃除時間にふざけることははじめのある行動とは言えませんね。目的を考えると、教室移動の時に、整列し、無言で歩くことははじめのある行動と言えます。

道具の使い方のはじめで考えてみましょう。たとえば掃除の道具がありますね。使い方のはじめとは、道具を使う目的を考えるということです。そして目的以外のことには使わない、ということです。したがって、ほうきで遊ぶことは、はじめのある使い方にはなりませんね。皆さんが一台ずつもっているクロムブックも、使い方のはじめを考えて使いましょう。家庭科室や理科室、音楽室にも、たくさんの道具が置いてあります。これらの道具も使い方のはじめを考えて使いましょう。すると道具を大切に使うことができます。

人間関係のはじめを考えてみましょう。挨拶やお礼は、人間関係のはじめになります。

次に、はじめをつけることのよさを考えてみましょう。校長先生からは二つ紹介します。まず一つ目です。はじめをつけると、してもよいこと、してはいけないこと、という善悪のはじめを考える力が育ちます。これは、自分で判断をする力が育つということです。

二つ目は、自覚をしながら過ごすことができるということです。自覚とは、今何をすべきで、何をしているのが自分でわかっているということです。自覚ができると、何をしているのかわからない無駄な時間やだらけた時間がなくなります。したがって「一日に何をしたのか」という一日に、自分がとった行動がはっきりとわかるようになります。これが、中身のある、充実した生活という意味です。

来週の8月29日から、にこにこ週間が始まります。にこにこ週間では、よりよい生活を送るための目標を立てます。はじめのある行動には、どんな種類があるか、どんな行動をとることがはじめのある行動になるのか、を考えると、たくさんの目標が考えつくと思います。そして、はじめのある生活を送ることが、にこにこ週間の目標を達成することにつながります。

以上で、校長先生の話が終わります。

(17) 令和4年度後期前半 2022年10月17日

主題：友達とのつき合い方

今日から後期が始まります。四月から新しい学級になって一年の半分以上が過ぎました。新しい友達もできて、学級の友達にも慣れてきたと思います。そこで今日は、友達とどのようにつきあってい

くか、という友達付き合いについての話をします。

みんなの周りにはたくさんの友達がいるでしょう。仲がいい友達もいるでしょう。仲がいい友達とは話が合うし、いつも一緒でしょう。反対に「あの人はちょっと苦手、あの人はちょっと嫌い」という友達もいるかもしれませんね。

自分と仲の良い人とだけ付き合うのはとても楽しいし、とても楽です。でも私たちは、自分と仲の良い人達だけに囲まれて生きていくことはできません。自分が好きな人だけに囲まれて生きていくことはできません。自分が嫌いな人や苦手な人とも一緒に暮らしていかなければなりません。係の仕事や委員会の仕事を一緒にする人、学級の友達の中には、「自分が苦手だな」と思う人もいます。そんな人とも一緒に生活していかなければなりません。

私たちは「この人は苦手だな、この人は嫌いだな」という気持ちをみんなもっています。誰でも苦手な人や嫌いな人はいるものです。

しかし、大切なことは、嫌いだからといって、いじわるをしたり、無視したり、いじめをしたりしてはいけない、ということです。大切なことは、自分が嫌いな人とどうやってつきあっていこうかと考えることです。大切なことは、自分と仲が悪い人とどうやってつきあっていこうかと考えることです。

これは友達とつきあうための工夫を考えることです。友達とつき合うための工夫とは、どうしたら自分が苦手な人や仲が悪い人とも楽しくつき合えるようになるかを考えることです。友達と楽しく過ごすためには、どんな工夫が考えられるでしょうか。学級のみんなで考えてみてください。

一人一人が、友達と楽しくつきあっていくために工夫できることを考えると、みんなの学級は、とても住みよいところになると思います。

以上で、校長先生の話が終わります。

参考文献

- アルボムッレ・スmanaサーラ （2007）「やさしい」って、どういうこと。 宝島社
伊藤守 （1995） こころの対話 講談社
加島祥造 （2007） 求めない 小学館
内田樹 （2002a）「おじさん」的思考 晶文社
内田樹 （2002a）期間限定の思考 晶文社
内田樹 （2007）下流志向 講談社
内田樹 （2008）昭和のエートス バジリコ株式会社